［共同研究報告］

フィールドワークにおける学際的調査を踏まえた制作活動のあり方とその教育方法についての研究 2

――奈良県天理市フィールドワーク――

岸本 章

安藤礼二

橋本 潤

中村 寛

堤 涼子

井沼香保里

1. はじめに

伝統的な建築物や街並みなどのデザインを行う際に、表面的なスタイリングだけでなく、その背景にある文化や歴史を理解したうえで、かたちづくる教育方法を確立するための研究である。デザイン、民俗学、文化人類学などの視点を活かしたフィールドワークの方法を研究し、住環境をはじめとする広くデザインを行う際に役立つ調査方法を探ることを目的とする。本研究の経過報告は「フィールドワークにおける学際的調査を踏まえた制作活動のあり方とその教育方法についての研究」（『多摩美術大学紀要 34』多摩美術大学、2019 年）に詳述している。そして、学際的なメンバーで行う研究として、岸本章（環境デザイン）、安藤礼二（芸術学）、中村寛（リベラルアーツセンター）、橋本潤（環境デザイン）、堤涼子（常葉大学造形学部）に加えて、井沼香保里（大学院研究室）が参加し、また、今回のフィールドワークには張恒韜（大学院博士後期課程）が同行した。

予算の関係で日本国内にてフィールドワークを行うこととし、信仰と環境が密接につながり現在も継承されている土地として、奈良県天理市を調査地とした。

2. 奈良県天理市フィールドワーク行程

6 月 26 日（日）

天理駅前広場コフフン集合（14 時出発）

1. 敷島詰所
   座学「天理案内」（解説：澤井真氏）
2. 天理教教会本部
   神殿・礼拝場・教祖殿・祖霊殿見学（解説：澤井真氏）
3. 夕づとめ（19 時 30 分）
   天理教教会本部にて見学（解説：澤井真氏）
   夕食
   敷島詰所（22 時到着）泊

6 月 27 日（月）

敷島詰所出発（4 時 45 分出発）

4. 朝づとめ（5 時）
   天理教教会本部にて見学（解説：澤井真氏）
   朝食
5. 石上神宮（いそのかみじんぐう）
   楼門（重要文化財）・拝殿（国宝）・摂社出雲建雄神社拝殿（国宝）・山の辺の道・内山永久寺跡見学（解説：澤井義次氏）
6. 天理大学　杣之内（そまのうち）キャンパス
   授業「天理教学 A1」（解説：澤井真氏）・天理図書館（解説：安藤正治氏、三濱靖和氏）・1 号棟・創立者記念館（若江の家）・9 号棟（ふるさと会館）・天理高校本校舎・天理参考館（解説：梅谷昭範氏）見学（総合解説：

澤井義次氏）

天理駅到着（12時到着・解散）

3. 見学地概要

3.1 敷島詰所

奈良県天理市は奈良県北部の宗教文化都市である。昭和29（1954）年に山辺郡丹波市町と二階堂村、朝和村、福住村、添上郡櫟本町、磯城郡柳本町が合併し、宗教団体の天理教を由来とする天理市となる。天理市中部エリアは天理教教会本部を中心に教義研究、教育施設、病院、信者詰所など天理教関連施設が点在している。なかでも天理教の思想を具現化した「おやさとやかた」と呼ばれる建築群（詳細後述）は、天理教教会本部を中心に東西南北の八町四方の線上に68棟を建て巡らす壮大な構想のもと建設が進められており、宗教都市として特徴的な景観となっている。[1]「おやさとやかた」は計画のうち26棟が竣工しており、そのうちの南西に位置し信者詰所の機能を持つ棟の一角の「敷島詰所」に宿泊することとなった。

また、敷島詰所の研修室にて、天理大学おやさと研究所講師の澤井真氏により「天理案内」といったタイトルにて、天理教や関連する建築についての解説をいただいた。

3.2 天理教教会本部

天理教では、信仰の対象である親神「天理王命（てんりおうのみこと）」が人間創造の際に最初に生命を宿し込んだ地点を「ぢば」と呼び、「ぢば」を中心に神殿が建つ。また、その地点の証拠として「かんろだい」が据えられ、礼拝の目標としている。そして、神殿を四方から取り囲むように東西南北4つの礼拝場があり、自由に参拝できるよう365日24時間開かれている。その神殿・礼拝場の北側には、教祖である中山みきを祀る教祖殿、教えを広め人助けに尽くした人々を祀る祖霊殿が建ち、それらは回廊で結ばれている。見学日は毎月26日の月次祭（つきなみさい）が執り行われており、多くの信者で賑わっていた。

3.3 夕づとめ

天理教の教会では、毎日、朝と夕に「おつとめ」といった礼拝がされている。「夕づとめ」は、一日の守護に対するお礼と反省、そして明日への祈りを込めて行われるという。[2]なかでも教会本部では、日の出と日の入りを基準に時刻が決められており、見学日は夏至に近く、「夕づとめ」は一年のうちで最も遅い時間である19時30分から行われた。

おつとめは神殿の「かんろだい」に向かい礼拝場にて行われ、拍子木（ひょうしぎ）、ちゃんぽん、太鼓、すりがねといった鳴物の演奏に合わせ、参拝者全員が天理教の原典の一つである「みかぐらうた」の第一節から第三節までを唱えながら、その意味を表す動作である「おてふり」を行う。また、「みかぐらうた」の第一節は「あしきをはらうてたすけたまへ　てんりわうのみこと」[3]といった節で21回繰り返され、第二節は「ちよとはなし　かみのいふことときいてくれ　あしきのことはいはんでな　このよのぢいとてんとをかたどりて　ふうふをこしらへきたるでなこれハこのよのはじめだし」[4]といった節で1回、第三節は「あしきをはらうて　たすけせきこむ　いちれつすまして　かんろだい」[5]といった節で3回が3度繰り返された。

そして、神殿・礼拝場で「夕づとめ」が行われた後には教祖殿、祖霊殿で礼拝が行われる。日没の少し前に礼拝場に入り、「夕づとめ」の礼拝を終えて建物から出ると辺りは暗くなっていた。

3.4 朝づとめ

先述のとおり、教会本部での朝夕の礼拝である「おつとめ」の時刻は変動するが、見学日には一年の内で最も早い時間である5時から行われた。「朝づとめ」は守護に対するお礼、今日一日教えに沿った行いをする誓いと無事過ごせるよう願いを込めて勤めるという。[6]また、神殿・礼拝場での「朝づとめ」の後に教祖殿、祖霊殿で礼拝が行われ、その後、教祖殿にて「てをどり」を二下りずつ、参拝者全員が立ってつとめる「てをどりのまなび」が行われた。日が出てまもなく薄暗いうちに礼拝場に入り、「朝づとめ」の礼拝、「てをどりのまなび」を終えて建物から出ると、辺りは明るくなっていた。「おつとめ」の時刻は、日出没の体感的、心理的な境界となる時間に設定されているように感じられた。

3.5 石上神宮

天理大学名誉教授の澤井義次氏の案内にて、石上神宮境内と日本最古の主要道路である「山の辺の道」、内山永久寺跡を見学した。

石上神宮は、大和盆地の中央東寄り、龍王山（りゅうおうざん）の西の麓、布留山（ふるやま）の北西麓の高台に鎮座している。境内地の北には布留川が流れ、布留川の川上から一振（ひとふ）りの剣が流れてきたので白い布に包み社に奉納したという昔話が伝わる。[7]日本最古の神社の一つで、物部氏の総氏神として信仰されてきた。また、七支刀（しちしとう）（国宝）、硬玉勾玉（こうぎょくまがたま）（重要文化財）など国や県の文化財である宝物を多く所有している。[8]境内ではニワトリが飼育されており、参道などでニワトリが自由に歩く姿が見られた。

(1)　楼門（重要文化財）

楼門は、棟木に記されている墨書によると文保2年（1318）に建立され、重要文化財に指定されている。入母屋造、檜皮葺の屋根で、一間一戸楼門である。[9]二階造りで上層部分には高欄が配置されており、かつては鐘楼門として鐘を吊るしていたが、明治初期の神仏分離令により取り外され売却された。[10]

(2)　拝殿（国宝）

図❶　石上神宮拝殿

図❷　石上神宮摂社出雲建雄神社拝殿

拝殿は、白河天皇（1053-1129）が永保元年（1081）に宮中の神嘉殿（しんかでん）を寄進されたものと伝えられ、入母屋造、檜皮葺の屋根で、桁行七間、梁間四間に向拝一間がつく、日本最古の寺院建築として国宝に指定されている。[11] また、文明2年（1470）修復、貞享元年（1684）上葺、享保18年（1733）修補、元文5年（1740）上葺、寛政10年（1798）修復、安政6年（1859）屋根替の計6枚の棟札が現存している。[12]（図❶）

(3)　摂社出雲建雄神社拝殿（国宝）

元は内山永久寺（うちやまえいきゅうじ）の鎮守の住吉社の拝殿だった寺院建築である。明治9（1876）年に神仏分離令により廃寺となり、鎮守社として住吉社は残されたが、明治23（1890）年に放火によって住吉社の本殿が焼失、拝殿だけが荒廃したまま残されていたところ、大正3（1914）年に石上神宮内の摂社、出雲建雄神社の拝殿として移築された。桁行五間、梁間一間で中央の一間は通路になっている「割拝殿」で、屋根は檜皮葺の反りのある切妻造、中央通路部分は唐破風造である。[13] 建立年代については、保延3（1137）年に建立され、その後13、14世紀に2回の改築により現在の構造、形式になったと考えられている。[14]（図❷）

(4)　山の辺の道・内山永久寺跡

山の辺の道は、『日本書紀』に「山辺道」として記載された古道の一部と考えられ、奈良盆地の東の山裾を縫うように、桜井から奈良へ通じるハイキングコースとして親しまれている。石上神宮を中間地点として北コース[15]は奈良に、南コース[16]は桜井に通じている。石上神宮の境内から山の辺の道の一部を通り、その山道の雰囲気を味わい、内山永久寺跡あたりまで歩いた。

3.6　天理大学　杣之内キャンパス

天理大学は、天理教の海外布教に従事する者の育成を目的として大正14年（1925）に創立した天理外国語学校を前身として、昭和24年（1949年）に発足した私立大学である。人間学部、文学部、国際学部、体育学部および大学院臨床人間学研究科、体育学研究科、宗教文化研究科を設置し、天理市内に杣之内キャンパス、体育学部キャンパスの2つのキャンパスを持つ。[17] 学校本部が置かれる杣之内キャンパスは天理教教会本部の南に位置し、大正15（1926）年に天理外国語専門学校の本館として建設された1号棟や昭和5（1930）年に竣工した天理図書館、「おやさとやかた」南棟の一角を利用した3号棟・4号棟、「おやさとやかた」南右第一棟を利用した天理参考館がある。

(1)　授業「天理教学A1」

授業「天理教学A1」は、春期月曜日1限に開講されており、天理教の基礎から学ぶ内容で澤井真氏が担当している。履修生は体育学部で、朝練を終えた学生が教室に集まっていた。授業前半に同席し、澤井真氏から今回の調査メンバーが紹介され、学生に対して、それぞれ見学した天理教教会本部などフィールドワークでの感想を述べた。

(2)　天理図書館

天理大学附属の図書館であるが、公開図書館としても機能しており、15歳（中学生をのぞく）以上であれば誰でも利用できる。また、『天理図書館善本叢書』、『天理図書館綿屋文庫俳書集成』など所蔵する貴重書の複製出版、海外約40か国との図書交換、蔵書の展示公開、蔵書の情報公開など、国内外の学術研究に貢献している。[18] 令和2（2020）年3月末日現在の蔵書数は約150万冊で、それらは各分野にわたり広く集められているが、特に東西世界の交渉史関係資料、カトリック東洋伝道史資料、古きりしたん文献、日蘭交渉史関係資料等の書群などの貴重書を所蔵していることも特徴の一つである。また、所蔵する文献のうち『日本書紀神代巻（上下　吉田本）』、『宋版劉夢得文集』など6点が国宝に、『和名類聚抄（自巻第六至巻十高山寺本）』、『古事記上（道果本）』など86点が重要文化財に指定されている。[19]

建築は、昭和5（1930）年に竣工し、内外装ともほぼ建築当初の姿をとどめており、図書館建築として価値が高い。[20] アメリカ合衆国のミネソタ大学図書館の設計プランを参考に坂静雄によって設計され、実施設計は島田良馨、施工は小坂井組である。

蔵書の増加に伴い昭和38（1963）年に東館が増築（坂静雄設計、竹中工務店施工）されている。

調査メンバーは、館長へ挨拶の後、図書館内部を案内いただいた。館内は中央に書庫が位置し、1階に館長室、事務室、閲覧室、2階に展示室、講堂などがある。（図❸）

(3)　1号棟・創設者記念館（若江の家）・9号棟（ふるさと会館）・天理高校本校舎

1号棟は、前身の天理外国語学校の本館として大正15（1926）年に竣工した。天理大学で最も古い建物である。武田五一と岩崎平太郎による設計で、鉄筋3階建て、一部4階建てのスパニッシュ様式の洋館である。昭和7（1932）年に昭和天皇の行幸に伴う整備の一環として修繕が行われ、現在の外観となったと考えられる。[21]（図❹）

1号棟の南西に建つ創設者記念館（若江の家）は、大正13（1924）年に建てられた洋館で、昭和30（1955）年に学校の創立30周年を記念しこの場所へ移築された。元は大阪府下中河内郡若江村（現：東大阪市岩田町）の天理教大阪教務支庁の敷地内に、天理大学の創設者である中山正善（天理教二代真柱）が「管長公勉強室」として建てられたものである。元の所在地にちなんで「若江の家」と命名されている。[22]

9号棟（ふるさと会館）は、卒業生の交流拠点として使用される建物で、1階は天理大学同窓会「ふるさと会」の事務室や会議室、2階は248席の大ホールがある。[23]古写真をパネルにして展示してあった為、写真を見ながらの休憩となった。

天理高校本校舎は、昭和12（1937）年に竣工した千鳥破風の屋根を持つ鉄筋コンクリート造の建物である。内田祥三による設計で、この後、内田は「おやさとやかた」の設計顧問となり、この千鳥破風の屋根が引き継がれたと言われている。[24]

(4)　天理参考館

天理大学附属の博物館である天理参考館は、「おやさとやかた」南右第一棟を利用している。世界各地の生活文化資料、考古美術資料を収集、研究、展示する博物館である。[25]『埴輪武装男子立像』（重要文化財）、閃緑岩製グデア像などをはじめ、約30万点の国内外の貴重な資料を収蔵している。[26]館内は、1階・2階に「世界の生活文化」コーナー、3階に「世界の考古美術」コーナーが設けられており、学芸員の梅谷昭範氏の解説でその貴重な展示を拝見した。（図❺）

4. 天理教の教義について

天理の都市計画を考える際に、天理の教えがどのように生まれ、またどのように展開し現在に至るのか考察することは必要不可欠である。しかし、天理の教えは、天理に住む人々のなかにいまだに生き続けている。天理の教えの外部に位置する者にとって、それを内在的に理解することは残念ながら不可能である。ただ、現在にまで伝わり、残され、論じられた文献を中心

図❸　天理大学附属天理図書館

図❹　天理大学杣之内キャンパス1号棟

として、その要点を抽出することを試みたい。

その際、ここではなによりも、国家神道に迎合せざるを得なかった『天理教教典』（明治教典）に代わって、第二次世界大戦敗戦後、新たに編纂し直された『天理教教典』（復元教典、1949年）にもとづき、天理教の外部からの視点と天理教の内部からの視点をそれぞれ参照しつつ、天理の建築を理解するために最小限必要と思われる教義の諸相を概略しておく。以下、天理教の外部の視点として、池田士郎・島薗進・関一敏『中山みき・その生涯と思想　救いと解放の歩み』（明石書店、1998年）を、天理教の内部の視点として澤井義次『天理教教義学研究　生の根源的意味の探究』（天理教道友社、2011年）を参照している。

「我は元（もと）の神・実（じつ）の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降つた。みきを神のやしろに貰い受けたい」。天保9（1838）年、長男の秀司の足痛を治めるために行われていた、修験道の行者であった中野市兵衛の「寄加持」（憑祈禱）の最中、神を憑依させる「加持台」（「よりまし」）となっていた中山みきに正体不明の強力な神（親神）が降った。その神は、自ら、世界の根源であり、万物

図❺　天理大学附属天理参考館

を創造した「元の神・実の神」であり、「天理王命」であると名乗った。天理教は、ここから始まった。このとき、みきは、数え歳で 41 であった。

天理の教えの外部の視点から考えれば、みきに宿った神は、みきが信仰していた浄土信仰や伊勢信仰（「おかげまいり」および伊勢神楽）、さらには密教的な転輪聖王信仰が一つに融合した神仏習合的な環境から可能になったと思われる（島薗進の所論にもとづく）。しかも、その核には、国家神道が根本から否定せざるを得なかった「神がかり」が存在していた。『古事記』『日本書紀』を読む限り、みきが体験した「神がかり」は、神道の根幹をなすものである。特に、記紀に描き出された神功皇后の「神がかり」の状況は、時間と空間の隔たりを超えて、みきの「神がかり」の状況と一つに重なり合う。神功皇后もまた、「審神者（さにわ）」（沙庭）である武内宿禰（建内宿禰）に導かれて、神の言葉を宿し、神の言葉を告げる「神主」となっていった。修験道は、中世以降、記紀に描き出された「神がかり」を、憑依のテクニックとして磨き上げてきたのだ。

しかしながら、みきに宿った神は、記紀にはまったく姿をあらわさない神であった。しかも、みきへの啓示が深まることと並行して、明治の革命、日本の近代化もまた進展していった。明治国家の神道は「神がかり」の宗教ではなく、国民の道徳として、その体系を再編しようとしていた。『日本書紀』では神功皇后に一巻が与えられていたので、つまりは天皇と同列として扱われていたので、天皇祭祀において、古代から中世にかけて、あるいは近世においても、女性による「神がかり」がきわめて重視されていたことは疑い得ない。女性による「神がかり」は記紀の天岩戸神話とも呼応する。明治政府は、そのような女性の天皇、女性による「神がかり」を否定し、排除することで国家神道の体制を整えた。みきの教えは、そのような国家神道とは根底から相容れないものであった。明治期を通して、国家による天理教弾圧が続くことになる。

みきに宿った「元の神・実の神」は、国民の道徳として再編された記紀神話とはまったく異なった創世神話を語り出す。みきが身近な者たちに繰り返し語った「こふき」（泥海古記）は、世界の始まりを「どろ海」（泥海）と表現した。その「どろ海」には無数の「どぢよ」（泥鰌）がおり、そのなかに夫婦の原型となる「うを」（魚）と「み」（巳）とが混じっていた――。

> この世の元初（もとはじま）りは、どろ海であつた。月日親神（つきひおやがみ）は、この混沌たる様を味気なく思召し、人間を造り、その陽気ぐらしをするのを見て、ともに楽しもうと思いつかれた。
>
> そこでどろ海中（うみなか）を見澄（みすま）されると、沢山のどぢよの中に、うをとみとが混じっている。夫婦の雛形にしようと、先ずこれを引き寄せ、その一すじの心（こころ）なるを見澄ました上、最初に産みおろす子数（かず）の年限が経つたなら、宿し込みのいんねんある元のやしきに連れ帰り、神として拝をさせようと約束し、承知をさせて貰い受けられた。

この「うを」と「み」という夫婦の雛形に男女の器官を発生させるために、親神は、男女の身体を構成する各要素（「道具」）をもった、乾の方向から「しやち」（鯱）を、巽の方向から「かめ」（亀）を引き寄せ、食べて味わい尽くす。食べて味わうことでその性質を消化吸収し雛形に仕込む。つまりは、産みつける。同じく、それぞれの身体の運動をつかさどる各要素（「道具」）をもった、東の方向から「うなぎ」（鰻）を、坤の方向から「かれい」（鰈）を、西の方向から「くろぐつな」（黒蛇）を、艮の方向から「ふぐ」（河豚）を引き寄せ、同じように食べて味わい尽くし、雛形に仕込む。雛形と道具が揃い、人間の創造が始まる――。

> かくて、雛形と道具が定り、いよいよここに、人間を創造されることとなった。そこで先ず、親神は、どろ海中のどぢよを皆食べて、その心根を味い、これを人間のたねとされた。そして、月様は、いざなぎのみことの体内に、日様は、いざなみのみことの体内に入り込んで、人間創造の守護を教え、三日三夜（かよ）の間に、九億九万九千九百九十九人の子数を、いざなみのみことの胎内に宿し込まれた。それから、いざなみのみことは、その場所に三年三月（つき）留り、やがて、七十五日かかつて、子数のすべてを産みおろされた。

天理の神は、まずは宇宙を形づくる「月」と「日」の神であり、さらには、森羅万象あらゆるものに生命を付与する「親」なる神であった。澤井義次は、次のように記している（註の指示は省略して引用する）――。

> 親神天理王命は、この存在世界における唯一の「をや（親）」、すべての生命の源である。親神による「根源的啓

示」をとおして、私たち人間は生の根源の地平において、自らの生の真の意味、すなわち、親神の十全の守護によって「生かされて生きている」という生の根源的事実性を自覚することができる。生の根源的事実性を自覚するとはいっても、私たちが生の本質を、ただ単に自らの力や知恵でもって理解するというのではない。生命の源である親神の自己啓示をとおして、生の根源的な意味をはじめて理解することができるのである。

われわれ人間が生きる存在世界とは、「親神の守護の理が充ち満ちている天理の世界」であり、「神のからだ」そのものであった（同じく澤井義次による）。宗教学的に考察するならば、親神天理王命とは、一神論的にして汎神論的な神、超越と内在を一つに結び合せる神であった。啓示する神、表現する神であると同時に産出する神であった。「どろ海」は、そうした神による生命発生の現場であった。そこでは、生殖と消化吸収の区別、性欲と食欲の区別がつけられなくなる。男性的な権力の論理を徹底的に解体し、新たに再構築してしまう女性的な生成の論理が貫かれてゆく。天理の「親神」とは、なによりも両性を兼ね備えた、産出の神であった。女性たちが新たな生命を産むことを助ける神であった。

「元の神」の消化吸収作用と重なり合った生殖作用によって、無限の生命が産み落とされてゆく。まず「どぢよ」が人間の種となり、その後、何度も消化吸収と生殖が繰り返され、その度ごとに「虫、鳥、畜類」などに生まれ変わり（「生れ更り」）が果たされ、徐々に人間としての形が、精神的にも身体的にも整ってくる。生は連続し、発展しつづける巨大な一つの過程であった。そこに終わりはない。そうした世界創造の聖地としての「ぢば」（地場）が定められ、その中心に「かんろだい」（甘露台）が建てられた。「かんろだい」は、月日親神が甘露（聖水）を与えてくれる聖なる台である。上には平鉢がのせられ、「かぐらづとめ」（神楽勤め）が行われると、平鉢の上に天から甘露が与えられ、聖なる「ぢきもつ」（食物）になる。

「かぐらづとめ」とは、選ばれた信徒の男女が親神の守護、「こふき」の泥海に出現する十柱の神の姿を象った聖なる動物の仮面をかぶり、鳴物にあわせて、親神による人間世界の創造を儀礼的に反復することである。天理の教えにおいて、食べること、産むこと、表現することの間に差異はなかった。あらゆる分野を横断しつつ、そこに一つに総合を与える未来の宗教の形がそこにある。それゆえに、天理教は道徳としての国家神道とは異なった、根源的な神による世界創世神話を語り続けたために、第二次世界大戦の終了まで、国家権力によって弾圧された。天理の教義の精神的にして物理的な中核をなす「かんろだい」は、人間世界創造の元の「ぢば」（地場）に据えられている台を意味し、宗教都市の中心で、現在に至るまで、その姿と力を維持し続けている。

図❻　天理教教会本部　神殿　南礼拝場

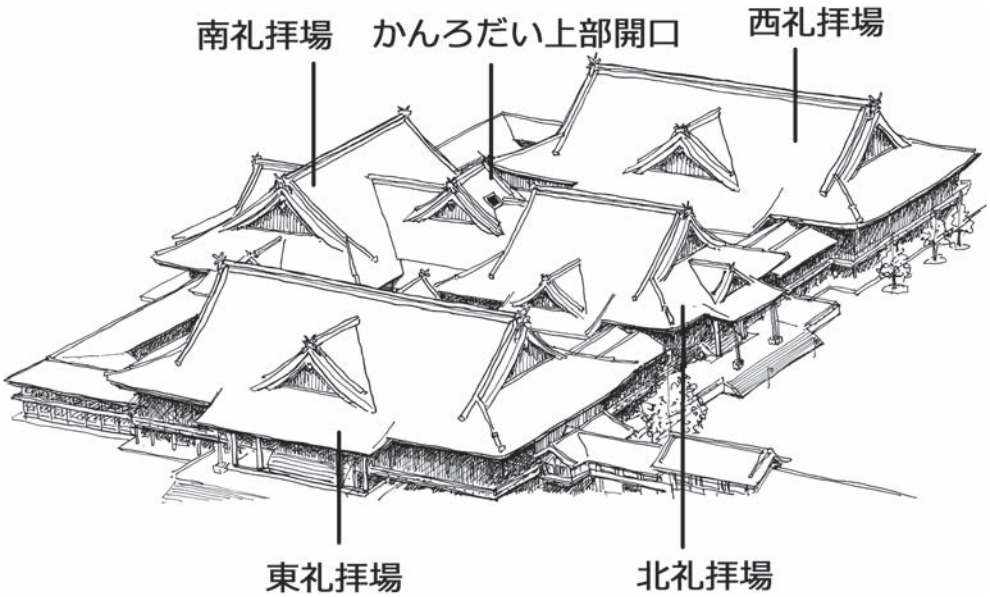
5. 天理教の建築

天理市の都市景観は鉄道や自動車で通過するだけでここが天理とわかる独特な景観を持っている。千鳥破風が並ぶ反った瓦屋根が乗った巨大な建築群は他では見ることができない。このデザインがどのようにして生まれたか、どのような意味があるか、また仏教寺院のような姿を見せる神殿はどのようにして現在の姿になったかなど、建築デザイン、都市デザインの視点から天理の環境を考察してみる。

5.1　神殿建築のデザイン

教祖中山みきは寛政10（1798）年、現在の天理市三昧田町に生まれ、天保9（1838）年に神のお告げを受けたときから天理教が始まる。その後、つとめ場所、中南の門屋、ご休息所と呼ばれる小さな建築で教えを説くという布教活動であったが、明治20（1887）年、教祖の死（信者の間では、現身を隠した後、今も存命と信じられている）のあと、大正普請と呼ばれる礼拝場の整備計画が始まる。人類創造の場所とされる「ぢば」の中心に天理教教会本部があり、そこに神殿が設けられる（図❻）。神殿の中心には「かんろだい」があり礼拝の目標となっている。「かんろだい」は六角形の台を1本柱が支える高さ8尺2寸（約2.48 m）の台で、台の下は床ではなく地面で、台の直上には屋根に開口が開いている。この開口は柱の配置からは内部空間の中心にはなるが、屋根として見ると造形的にも構造的にも中心ではないところに開いている。当然雨が入って来るこの開口は、ここが空と繋がっていることが重要であるが、一方外観からはどこに「かんろだい」があるかはほとんどわからない。「かんろだい」という発想は教祖の存命中の明治6（1873）年に雛形が制作されたときに始まるが、その後小石が積まれていたという時期を経て昭和9（1934）年、南礼拝場竣工に合わせて現在の「かんろだい」となる。

大正13（1913）年に北礼拝場が竣工した当時、「かんろだ



図❼　神殿俯瞰図（作図・岸本）

い」は礼拝場の南にあり、北から南へ向かって礼拝するかたちになっていた。この時点での礼拝対象と礼拝する側の位置関係は神社建築の本殿・拝殿や仏教寺院の内陣・外陣に見られる関係と同じである。しかし昭和普請の際、中山正善（2代真柱＝教祖の後継者）によって南側に礼拝場が設けられ、「かんろだい」をはさんで向き合うようになる。昭和9年（1934）年に竣工する南礼拝場は北礼拝場より大きく、空間としてはこちらが正面になってくる。この対象物の両側から礼拝するという平面は宗教建築としては極めて珍しい。この時期全国の天理教会が「ぢば」である天理の方向を向くようになってくる。これは本殿・拝殿の前後関係から「かんろだい」へ向かう求心性へと礼拝方法が転換したともいえる。これはイスラムのメッカとモスクの関係と似ている。天理教建築の造形としては仏教寺院や神社と似ているが、信仰の体系は一神教であり、むしろユダヤ教、キリスト教、イスラム教と近い。

さらに昭和59年（1984）年、東西礼拝場が竣工し、「かんろだい」を四方から囲んで礼拝するかたちとなり、「かんろだい」が持つ強い求心性はメッカのカアバ神殿のような存在になってくる（図❼）。また求心的な空間は平安時代、浄土信仰とともに数多く造られた阿弥陀堂建築とも似ている。阿弥陀仏の周りを、念仏を唱えながら回ることで礼拝する阿弥陀堂は、阿弥陀仏自体に正面性はあるがその周囲は同じ幅で求心的な空間になっている。その意味では、中心に礼拝対象を置く建築に違和感はなかったと思える。「かんろだい」を囲む求心的な空間の発想は教祖の言葉である「神の屋敷は四方正面である」を建築として表現したと言われている。[27] 明治24（1891）年、すでに「ぢば」には「四方四面鏡やしき」という言葉がある。当時これは概念としての話で、そのまま具体的な礼拝空間のあり方としては想定していなかったのかもしれないが、長い年月を経て

図❽　神殿鬼瓦千木と鰹木

建築空間として教えを実現できたとも言える。

神殿は教祖殿（教祖中山みきが存命と信じられる建物）と祖霊殿（天理教の物故信者の霊を合祀する建物）と幅の広い廻廊でつながっている。この廻廊は御所の紫宸殿のようにも見えるが、特別意図されたものではなく増築をくりかえした結果かもしれない。この度重なる増築によって屋根が極めて複雑に入り組んでいるが、屋根架構を架けなおすようなことはしていない。

神殿の外観は反りがある入母屋造の瓦屋根の造形から仏教寺院の形態に近いのは一目でわかる。垂木が2段になった二軒（ふたのき）や正面の虹梁や蟇股も寺院的だが、柱の上は舟肘木のみで複雑な斗供などは無い。また鬼瓦の上に神社建築に見られる千木と鰹木が乗っている。千木も鰹木も本来は棟の上に乗るがここは鬼瓦の上に乗っている。また千木は切り口が縦のものが外削ぎで祭神が男神、切り口が水平のものが内削ぎで女神と言われることが多く、ここでは外削ぎになっているものの男女神の話は諸説ありどちらともいえない。外観のデザイン上のバランスで選択していると思われる。大正時代、すでに天理教建築の鬼瓦に

千木、鰹木は存在していてシンボルのひとつになっている（図❽）。神殿は70年以上かけて増築した結果が現在の姿である。中に入ると防火区画のシャッターなど今要求される設備は整っているが、全体としては建築年代の差や増築の痕跡はわかりにくく、一体感ある礼拝空間となっている。

5.2　天理の都市デザイン

「ぢば」が決まり「かんろだい」が作られ、神殿が作られると周囲の関連施設の整備が続き、街づくりへと発展していく。大正14（1924）年に天理大学の前身である天理外国語学校が設立され、翌年奈良県初の鉄筋コンクリート造建築として新校舎が完成する。昭和5（1930）年にその付属図書館（現・天理大学附属天理図書館）が作られる。これはミネソタ大学図書館のプランを参考に、京都帝国大学教授の坂静雄の設計によって建てられた。昭和38（1963）年、同じ設計者によって増築されるが、現在も内装、外装ともほぼ当時の状態が維持されている。その配置の角度はまだ神殿の軸線とは関係ない。

中山正善は昭和8（1933）年築の東方文化学院東京研究所（現・拓殖大学国際教育会館）を見学し、その設計者である内田祥三に天理高校（旧制天理第二中学校）（図❾）の設計を依頼し、昭和12（1937）年に完成した[28]。東方文化学院東京研究所は鉄筋コンクリート造に瓦屋根を乗せる典型的な帝冠様式で屋根には東大寺大仏殿のような鴟尾が乗っている。1930年代のこの規模の建築の主流であった帝冠様式は、戦後の価値観から国粋主義や軍国主義と重ねて見られることが多かったが、当時はこの様式を強制されることも奨励されることもなく、もっぱら建築家たちによる日本的なデザインの在り方を模索する中での流行であった。内田祥三は元東京帝国大学総長で、大正14（1925）年から昭和16（1941）年にかけて東京大学本郷キャンパス各校舎の設計を続けてきた。これは天理高校とほぼ同時期であるが、本郷キャンパスはゴシック風の縦ラインを強調した単位の集積で構成する手法で、帝冠様式とは全く異なっていた。現在につながる千鳥破風が並ぶ天理スタイルは天理高校から始まるのだが、内田祥三が提案したというより中山正善の依頼に応えて生まれた造形と言えるのかもしれない。

現在も進められている天理の壮大な都市計画である、おやさとやかた構想は中山正善（2代真柱）によって昭和28（1953）年に発表される。教祖の言葉である「年限だんだん重なれば、八町四方に成る事分からん。」の中に具体的な規模があることから八町四方をそのまま具現化したプランで、「ぢば」を中心とした一辺約八町（872 m）の正方形の範囲がベースになっている。工事は翌昭和29（1954）年に始まるが、この年は六町村の合併により天理市が誕生した年でもあり、宗教団体名を冠する唯一の自治体として、宗教文化都市・天理がスタートし、おやさとやかた構想と同時に都市化が進むことになる。

図❾　天理高校

図❿　おやさとやかた　南中央部分

このおやさとやかた構想に天理高校を設計した建築家内田祥三が参画する。そして東大建築学科卒で内田祥三の弟子にあたる奥村音蔵が実施設計に関わっていくことになる。奥村音蔵は天理教信者でもあり、卒業制作で共同宿泊所を手掛けている。

この構想は八町四方に鉄筋コンクリート造6階～7階建てで瓦屋根に千鳥破風が並ぶ建物が連続して囲むように建つ計画である（図❿）。重要な施設の中心は信者詰所と呼ばれる全国各地から訪れる信者のための宿泊施設であるが、南には天理参考資料館や天理大学の校舎の一部、天理小学校、北西には病院など各種の施設が含まれている。完成すれば3.5 kmに及ぶ長大建築になる予定だが、現在まだ長さにして半分以下である。しかし、すでにコンセプトもデザインボキャブラリーも決められているので、この先デザイン的に迷走することはなく着実に完成に向けて進めていくことになり、継続中であることにも意味がある。

一方信者詰所自体はすでに多数存在し、この八町四方には収まらず現在は3 km四方ほどの範囲まで点在している。これらはほとんど瓦屋根ではあるが千鳥破風が並ぶ造形とは限らない。

いかなる宗教であっても宗教建築はその信仰への満足感やあ

りがたさ、平穏さを感じられる建築空間でなくてはならない。そのために古今東西さまざまな宗教建築で空間演出が試みられてきた。それは教義に沿ったデザインでなくてはならないし、すべての人が理解できるためにはわかりやすい既知のデザイン要素が含まれることも必要になってくる。中山正善も昭和普請の計画にあたって「懐かしい感じを抱けるように」という言葉を残している。しかしどこにでもあるものではなく、ある種突出した特徴のあるデザインもまた求められ、その結果として現在、天理の建築でしか見ることができないデザインの独自性が生まれていると言える。

6. おわりに

天理はその都市計画から建築様式まで天理教の教えに基づいて作られている日本でも珍しい宗教文化都市である。その造形理念は教義を具現化するという方法でデザインされている。そこに見られるデザインはそれまでに存在しなかったものではなく、過去にあったものの組み合わせやアレンジによって表現されている。それはすぐにわかる天理教のアイデンティティを表現していてこの土地特有の景観を生み出している。環境デザインにおいてその場所らしさや相応しさの表現が求められることは多い。その場合その土地の過去の建築を参照することになるのだが、過去の蓄積がない土地で新しい「らしさ」を表現するにはどのような根拠でデザインするべきか。宗教施設に限らず、他とは違う造形によって統一感のある環境をデザインすることが求められる機会がある。そのときに何らかの精神性を具体的な造形に落とし込むという作業が必要になり、そのプロセスの研究が必要となる。

2018年から始まったこの共同研究は、初年度富士吉田のフィールドワークを実施した後、2019年に天理のフィールドワークを実施する準備がほぼ完了していたところでコロナ禍に突入し、2年の延期を経て2022年にやっと実施することができた。また2021年には日本民俗建築学会のシンポジウム「信仰と環境 ── 日常の住環境に見られる霊的な場 ──」を多摩美術大学上野毛校舎からリモートで実施し、安藤が講演し、岸本と堤が実行委員を務めた。この中で講師である芝浦工業大学の清水先生が提唱していたスピリチュアルランドスケープという見方が本研究の方向性と合致するものであることを知った。

人類の歴史の中で世界中の環境や景観はさまざまな信仰とともに生まれ、維持されてきた。それらは保存対象や研究対象にはなっているが、現代のデザイン教育とは切り離されている傾向がある。美しい環境を創造するときにスピリチュアルな視点は重要であり、時代とともに信仰の形態が変わっても環境を維持するための大きな力になっていることを認識する必要がある。

これらを環境デザインとしてどう教育していくか、今後も続く課題である。

謝辞

見学先、宿泊先の交渉や丁寧なご案内、ご解説をいただいた澤井義次氏、澤井真氏をはじめ、天理大学附属図書館の安藤正治氏、三濱靖和氏、天理参考館の梅谷昭範氏に厚く御礼を申し上げます。

＊執筆分担：

1、2および3堤涼子、4安藤礼二、5および6岸本章

註

(1) 天理教公式ウェブサイト https://www.tenrikyo.or.jp/#（2022年9月5日閲覧）
(2) 前掲1
(3) 深谷忠政『みかぐらうた講義』天理教道友社、1956年、19頁。
(4) 前掲書3、28頁。
(5) 前掲書3、35頁。
(6) 前掲1
(7) 山崎しげ子「奈良のむかしばなし17」『県民だより奈良』2009年1月号、奈良県広報課、2009年
県民だより奈良電子版 https://www.pref.nara.jp/koho/kenmindayori/tayori/t2009/tayori2101/（2022年9月5日閲覧）
(8) 石上神宮ウェブサイト https://www.isonokami.jp/（2022年9月5日閲覧）
(9) 国指定文化財等データベース https://kunishitei.bunka.go.jp/（2022年9月5日閲覧）
(10) 前掲8
(11) 前掲9
(12) 前掲8
(13) 前掲9
(14) 前掲8
(15) 天理市観光協会ウェブサイト https://kanko-tenri.jp/walking-course/yamanobenomichi-north/（2022年9月5日閲覧）
(16) 前掲15
(17) 天理大学ウェブサイト https://www.tenri-u.ac.jp/（2022年9月5日閲覧）
(18) 天理図書館ウェブサイト https://www.tcl.gr.jp/（2022年9月5日閲覧）
(19) 前掲9
(20) 奈良県教育委員会『奈良県の近代化遺産 ── 奈良県近代化遺産総合調査報告書 ──』2014年、62頁。
(21) 前掲17
(22) 前掲17
(23) 前掲17
(24) 前掲17
(25) 天理大学附属天理参考館ウェブサイト https://www.sankokan.jp/（2022年9月5日閲覧）
(26) 前掲25
(27) 澤井真「2020年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（6）八町四方」『グローカル天理』第255巻3号、2021年、10頁
(28) 五十嵐太郎「中山正善先生の主教都市創造における思想とその背景」創設者生誕100周年シンポジウム報告書（2006年3月）